



ちよっとそこまで ~お散歩日和 (植物編)~



# ツワブキ



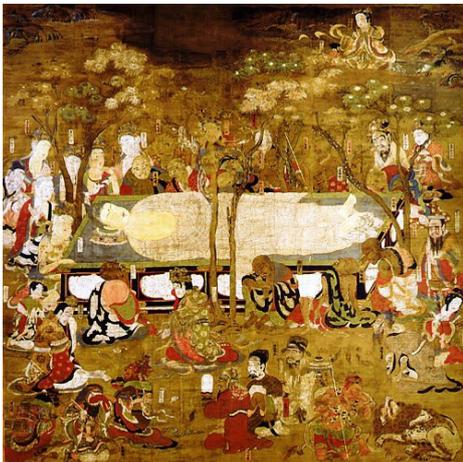
ツワブキが、晩秋の頃からずっと集会室前に咲き続けています。フキに似ていながらつやのある葉をもつので、ツヤフキ、またはツヤハフキがなまったものとの説が最も納得できます。俳句の世界では、フキが夏の季語であり、フキノトウが春であるのに対して、ツワブキは冬の季語になっています。咲き始めは晩秋ですが、冬の印象が強いのでしょうか。確かに、立ち枯れた木立ちの中に真っ黄色の花の房を見出すとドキリとさせられます。または、咲く時期が小春日和の季節と重なるので、統一感を持たせたのかもしれませんが。小春日和は冬の季語です。

## ちまちまとした海もちぬ石露の花 (一茶)

一茶の有名な俳句です。「石露の花」と書いて「つわの花」と読みます。これは、「暮らしのことば 語源辞典」によると、古くは単に「ツハ」と呼ばれていたとのことですから、単に字数の関係ではなく、古語としての言い方を大事にしているという理由によるものだと思います。



この花との出会いは、遠く御蔵島でした。海風の強い崖や岩の縁から数え切れないほどの黄色の花が一斉に顔を出すさまは強烈でした。確かに、その後目にする光景も伊豆半島などの海沿いが多かったように思います。そういう広大な海を眼前に控えながら、自身の葉のくぼみに、小さな露を載せている様子を、一茶は「ちまちまと」という滑稽な言葉でからかったのです。実に愉快的気分させる句です。



ところで、その花々をあまりに美しいと感じた私は、たくさん摘んで花瓶に挿して部屋に飾ったのですが、数日後、強烈な悪臭に苛まれることとなります。理由は全く分かりません。大自然の中に戻せ、こんな「ちまちまとした」部屋に押し込めるなど必死に訴えてきたのでしょうか。

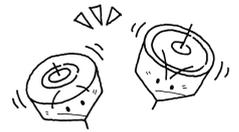
ある人が、この花を「自灯明 (じとうみょう)」に譬えていました。自灯明とは、釈迦が臨終の際、弟子たちに残した遺言のことです。自分の進むべき道が見えないような暗闇の中でも、自分の運命を静かに受け入れ、自分を信じ、自分の心の灯を見つめて歩いていきなさいという教えです。そう言われてみれば、岩場に咲くツワブキの花の美しさに、そんなマイルストーンの雰囲気は漂っているとさえ言えなくもありません。ツワブキの花言

葉が「困難に負けない」とあることにも関係があるのでしょうか。

さて、このツワブキですが、食べられるそうです。私はそんな悪臭体験が災いしてか、食べたことはありませんが、フキ同様に春先の若い葉は美味しいようです。ただし、アルカロイド系の毒があるそうなので、しっかりと灰汁抜きを忘れないことが肝心でしょう。

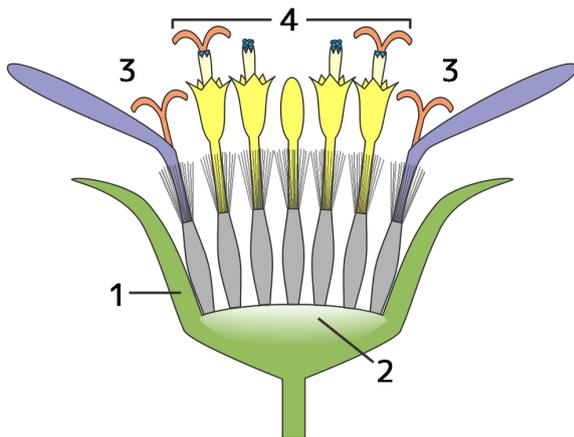
そんなこともあってか、今では庭先にツワブキを育てる家が増えてきたように思います。その良さに着目して長所を列記してみました。

- ・日陰でも良く育つ常緑樹です。冬場の緑は貴重です。
- ・植えっ放しで手間いらず、しかもどんどん増えていきます。土質も問いません。
- ・雑草が生えにくくなります。グランドカバーに最適です。
- ・花の少ない時期に、豊かな色どりを添えてくれます。
- ・食用になります。



ここからは、少々生物学的な話になります。興味のない方は飛ばしてください。

まずは、キク科の植物の特色ですが、多数の小さい花が丸く密集して、1つの花のように見えています。このような花序（花の集まり）を「頭状花序」、略して「頭花」と呼んでいます。さらに、その頭花には舌状花（3）と筒状花（4）の2種類があります。ツワブキは下図のように、その2種類が混在していますが、タンポポは舌状花だけ、アザミは筒状花だけしかありません。それがキク科の花の個性ともなっています。



(1)と(2)は、ガクではなく、葉が変形したもので、「総苞」と呼ばれています。つぼみの時は、小さな緑色をした葉のうろこ状のものが包み込んでいますが、これが「総苞」です。身近な植物では、ドクダミやミズバショウ、ハナミズキの花びらに見えている白い部分も、この総苞が発達したものです。



舌状花



筒状花

